

折れた月は正方形にぴったり
と収まる。

chrcc

いっそ、閉じこめて何処にも行けないようにしてくれ。

足枷でも手枷でも何でもつけて動けないようにしてくれ。

目隠しして何も見えないように、耳も塞いで何も聞こえないようにしてくれ。

そう、泣いて懇願した。どういった経緯でこんな女々しい科白を吐いたのかは、もう覚えていない。吐いた科白に嘘はなかった。細部までも真実で構成された言葉であった。

僕の言葉に、マサキが何の感情も込められていない瞳で笑った。それで繋がれるのは、俺でしょう。マサキが言う。アナタ、そうやって、俺のこと縛るつもりなの。笑ったまま問われて、違うと首を振った。首を振る度、ほろほろと涙が落ちた。自分が首を振りながら涙を流す様を思い浮かべた。自分という男が醜態を晒している様は、至極見苦しいものである。見苦しい物であると自覚しても、尚自分が涙している様を思い浮かべ、どう動けば彼に真実を訴えているように映るか考えた。

「違う」

ひく、としゃくりあげ、呟いた。

呟いた声が掠れていた。自分の声ではないような「違う」を聞き、「違う」という言葉が違っていることに、気がついた。違わないのだ。彼の言っていることは正しい。閉じこめて欲しいと願うのは、自分自身をマサキの枷にする為であることに、ようやく、気がついた。僕は、マサキを束縛したいと願っている。僕を閉じこめることによって、四六時中マサキが僕を案ずることを望んでいるのだ。

この年下の恋人への執着は、どこかが狂っている。この濁世の中、そこだけがはっきりと清く見えるような執着であったけれど、その分ははっきりと狂っていた。この狂った執着を、好きだとか、愛しているだとか、そういった感情に限りなく近い何かであると結論付けて、僕は再び首を振った。何も違わないと気づいた上で、「違う」と呟く。

マサキが溜め息した。

「いいよ」

ずっと立ったまま座り込んだ僕を見下していたマサキが、しゃがんだ。

僕と視線を同じにして、もう一度、溜め息する。

「アナタのこと、閉じ込めてあげる」

マサキの言葉が上手く受け取れずに、首を振り続けた。

もういいとばかりに、マサキに両の手で顔を包まれ、親指で涙を拭かれた。ぐいぐいと擦られて、痛い顔を顰めた。

「どうしたら、こんなに泣けるの」

顔を固定され、そのまま頬を舐められた。ざらりとした感触と熱が心地よくて、目を閉じた。目を閉じた拍子に、涙が、また、こぼれた。目尻に口づけられ、涙を吸われる。

「ねえ」

涙を吸いながら発声され、唇の振動が目尻をくすぐった。

「アナタのこと、閉じこめてあげるから。ね」

「な、に」

「俺のお願いも、聞いてよ」

「うん？」

「いい？」

マサキが、子供をあやすような口調で尋ね、首を傾げた。傾げた様に見えた。実際は頭部が微動しただけであったかも知れない。

こくりと頷く。いいよ、何でも、聞く。上手く発音できない。もどかしかった。

さっきの感情の籠もらないような笑いとは違う様子で、マサキが笑った。こんな風に、素直な笑い方をすれば、幼い顔になる。

「俺のことも、閉じこめて」

幼い、思春期という言葉にすら胸を高鳴らせる子供の顔、それなのに随分低い声で、言った。マサキが、マサキの声で、言った。

正方形の天窗から三日月が覗いていた。

白い椅子、床に積まれた単行本、それと木枠の時計だけがあるこの部屋に、僕らは互いを閉じこめあっていた。

独り占めしあうのだと、マサキは言う。俺はアナタのこと、アナタは俺のことを独り占めしていいんだよ。この部屋の中でなら、いいんだよ。

いいんだよ。いいんだ、よ。そう繰り返す彼の声が、じわじわと頭の中を浸す。

空腹も、乾いた喉も、垂れ流しにされた汚物の異臭ですら、僕を幸福で満たそうとする。

やはり、狂っているらしい。僕も、マサキも、この執着も、この部屋も、狂っている。

僕らがこの部屋に籠もって、一週間が経っていた。

寝返りをうった。背中合わせで寝ころんでいたマサキの背中が目に入る。元から細い男だったが、ここ数日で急激に痩せた。マサキも寝返りをうった。凶らずも向き合うような体勢になったので、マサキの頬に手を伸ばした。痩けた頬は、常より淫靡な彼の雰囲気をもっと濃くしていた。

マサキが僕のシャツの裾を引き上げ、腰に手を這わした。

「痩せたね」

この辺、触り心地悪くなった。そう言って、腰骨を確認するように手のひらを押しつける。

胸のあたりが、つきり、とした。欲情したのかもしれない。

「セックスでも、する？」

欲情したのかどうか確かめたくて、誘った。口に出せば、どこかぎくしゃくとした感じで、どうやら欲情した故に、胸の辺りが、つきり、としたのではないと分かった。

「違うでしょう」

マサキが、腰に這わせていた手を止め、言った。

うん、と微かに頷いてみせれば、マサキは満足そうに笑んだ。

天窗の向こうの月が、滲んだ。

つきり。

再び胸が痛んで、更に月が滲んだ。

沈んでしまう気がした。うとり、ゆたり、と深い場所へと到達しようとして揺れている気がした。

「泣きそう」

マサキが、震えた声を発した。

何故、とは問えなかった。問えなかったが、僕とマサキの泣きそうな理由は同じ物である確信があった。

三日月を眺めながら、願う。

望むらくは、このまま、ここで、マサキと、死ぬるように。そう、願った。きっと、そうなると思っていた。幸福なまま死ぬると、僕も、マサキも知っていた。

マサキが、一粒、涙をこぼした。

満たされていた。

正方形の枠にびたりと収まっている折れた月とは逆に、やたらと満ち足りた心地であった。

愛しかった。

とても、愛しかった。